

水と文学 (12)



前東京都水道局理事 小泉 智和

樋口一葉の代表作「たけくらべ」は、かつて彼女が住んだ下谷区龍泉寺（現台東区竜泉）が舞台となっています。

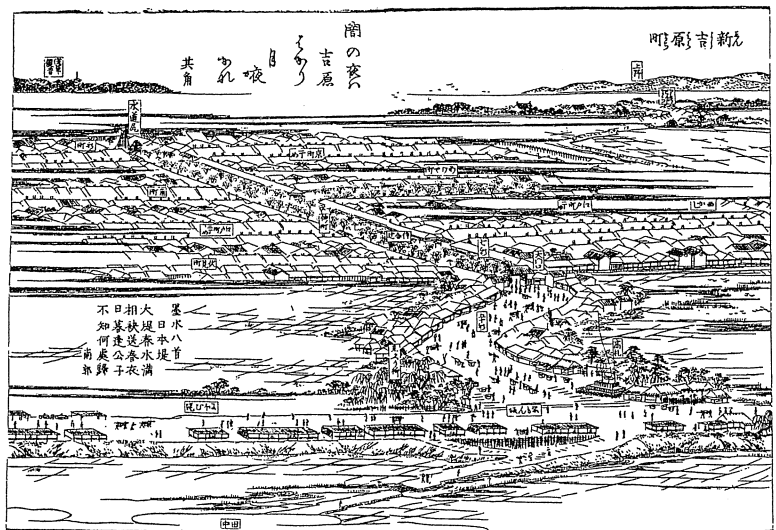
「廻れば大門の見返柳いと長けれど、お歯ぐろ溝に燈火うつる三階の騒ぎも手に取る如く、明けくれなしの車の行来にはかりしれぬ全盛をうらなひて、大音寺前と名は仏くさけれど、さりとは陽気の町と住みたる人の申き、……」から始まります。

彼女の住んだ家は、吉原遊郭への道筋にあたり、大音寺通り（「たけくらべ」の中では、気違い街道、寝ぼれ道とも記しています。現茶屋町通り）と称し、狭い通りを挟んで様々な店が軒を並べていました。住む人の多くは、郭者です。彼女は、引っ越してきた当日の日記の中で「くるわ近く人気（じんき）あしき処」と人々語りきかせたるが男

気なき家の、いかにあなづられてくやしき事ども多からむ」と、述べています。

小説は、女郎になる以外道がない大黒屋の美登利と僧侶となる龍華寺の信如との想いのずれを中心に、車引きや鳶、高利貸しといった家の子供たちの喧嘩や遊びを通じて、運命の残酷さやあわれさを描きます。

吉原は、江戸時代「遊女三千人天下御免の場所」で、南北327m、東西245mで、9m幅の俗称「お歯ぐろ溝（どぶ）」で囲まれていました。一葉の時代には、堀



江戸名所図絵・新吉原町

は埋め立てられて約4 m幅になっていました。

「お歯ぐろ溝」は、遊女の逃亡防止のために掘られた溝で、その溝は、遊女が歯を染めたあとの「おはぐろ（鉄漿水・かねみず）」を捨てたので、「お歯ぐろ溝」と呼ばれていました。もちろん、どぶは遊客の飲み残した酒なども流れ込む吉原の大下水でありました。

○ 樋口一葉のこと

近代女流作家第1号である一葉（本名奈津）は、明治5年3月25日、父樋口則義、母たきの二女として、東京府の構内官舎（今日の日比谷シティの所）で生まれました。両親は、大菩薩峠の山懐、山梨県大藤村（現塩山市中萩原）の出身です。

則義は、慶応3年に江戸南町奉行所支配下の八丁堀同心となり、明治維新後東京府庁、更には警視庁に勤務しています。この頃の樋口家の生計は豊かでした。

一葉は、私立青梅小学校高等科を首席で終了するほどの能力があり、学問が好きでもあったので、父は、娘の希望するとおり進学させてやろうと考えていました。しかし、母が「女が学問を身に付けるのは好ましくない」と意見するので、一葉は進学を断念しました。

不憫に思った父は、通信教育で和歌

を学ばせ、後19年（14歳）に中嶋歌子の主催する歌塾「萩の舎」に入門させました。一葉は、短い生涯に4000首の和歌を詠んでいます。

明治20年、父が警視庁を退職した年、大蔵省に勤めていた長兄が肺結核で病没し、22年には、一葉の良き理解者であり、その才能に期待をかけてくれた父が事業（東京荷馬車運輸請負業組合）に失敗し、更には心労や脚気がもとで死んでしまいました。

樋口家の生活は困窮し、質屋通いや知人からの借金に頼る生活が始まりました。

母、一葉（17歳）、妹の三人は、債権者の追及を逃れるため、陶芸家として自立していた次兄のもとに同居しますが、母と次兄との折り合いが悪く、翌年、姉のふじ夫妻が住む本郷区菊阪町に転居します。この頃から、一葉は小説らしきものを書き始めます。

明治24年に、妹くのにの友人のつてで、朝日新聞の小説および雑誌担当記者の半井桃水に会い、小説の指導を仰ぎます。翌年、小説「闇桜」を発表し、以後「うもれ木」等を発表していきます。

然して、母、妹との三人での裁縫・洗い張りの内職では生活は苦しく、これを打開すべく一葉は商いすることを考え、明治26年（21歳）に下谷区龍泉寺町に転居し、荒物・駄菓子のお店を始

めます。借金をしての開店であり、所詮素人商売、売上も少なく、また廓近く女三人が住むことに母・妹が嫌気を示すので、僅か9ヵ月余で店をたたみ本郷区丸山福山町（現文京区西片）に引っ越します。

明治27年5月、丸山福山町に引っ越してから、内職の傍ら本格的執筆に入ります。

この年の12月に「大つごもり」を発表してから、没年の29年1月までの14ヶ月間に一葉の代表作「たけくらべ」をはじめ、「軒もる月」、「ゆく雪」、「うつせみ」、「雨の夜」、「月の夜」、「にごりえ」、「雁がね」、「虫の音」、「十三夜」、「この子」、「わかれ道」が執筆されます。

一葉は、以前から頭痛がする、肩が凝ると言ってましたが、明治29年4月頃から熱が出るなどの結核の兆候がでました。8月病が重くなり、10月、文壇仲間の斎藤緑雨が軍医でもある森鷗外に頼み、鷗外が紹介する青山胤道が往診しましたが、氏は家人に、最早入院しても仕方がないと伝えました。

一葉は、11月23日、肺結核により24歳の若さでこの世を去りました。

戒名は「智相院釈妙葉信女」で、樋口家の墓は、関東大震災で、中央区築地から杉並区の築地本願寺・和田堀廟所に改葬されています。



樋口 一葉

○ 江戸時代の下水道

冒頭、「お歯ぐろ溝」を述べましたので、江戸時代の下水に触れて置きましょう。

一般的に、汚水や雨水は、武家屋敷や社寺では周りに廻らされた堀に流れ更に川へ、町家については、各家・長屋から流れ出た水は敷地境や町境にあったどぶへ流れ、町から町へ通じる下水を通過して近くの堀や川に流れ下って行きました。

当時、江戸は「水都」と言われるぐらい、街のあちこちに堀や川があったのです。

糞尿については、江戸近郊のお百姓が喜んで汲み取り、肥料にしていました。

江戸の下水は、当初下水奉行を置き、後道奉行が管理する公儀下水と町方が管理する町内下水とがありましたが、

自治組織が確立していく中で武家と町民が分担し合って改修や浚渫（どぶさらい）を行っていた様に見えます。

○ 近代の下水道

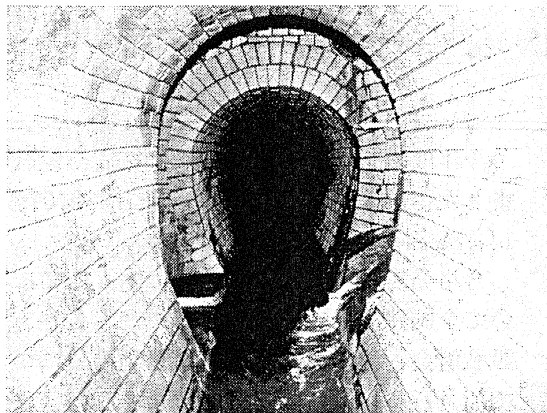
明治になり、当時東南アジアで流行していたコレラが持ち込まれ、全国に蔓延、上下水道の整備が急務となりました。

当時の新聞は、「東京市下水の仕末、不行き届き至極にして病毒蔓延の源をなす、下水の設備なき都市は廁を備えざる家と同様。そして外人が本所割下水や浅草のオハグロどぶ（筆者注・吉原は浅草寺裏にある）を見たら何というか、帝国ホテルの堀割が臭くて投宿を見合わせた者がある」と、記しています。

そこで、明治15年のコレラ大流行を機に、人家が密集している上に、非常にじめじめしていて汚水の流れが悪い神田地区に、明治16年から17年にかけて洋式下水道が整備されました。しかし、この時にはまだ下水処理は行っていませんでした。

その後、19年にまたまたコレラが大流行して、コレラ対策が急がれ、費用対効果を考えて、下水道より水道の整備が優先されることになりました。それ故、東京に下水処理施設が出来たのは、浅草区・下谷区の一部を対象とし

た三河島污水処分場で、大正11年のことでした。



近代文化遺産として史跡指定された神田下水

来年、新札の顔は一万円札が福沢諭吉、五千円札が樋口一葉、千円札が野口英世になります。薄幸の人一葉には、千円札が似合うと思うのですが……。

一葉が描いた吉原の街は、今日、街路には、たけくらべの見返柳よろしく、柳の木が植えられています。ネオンまたたくソープランドの店が建ち並んでいます。

「おはぐろ溝」の跡は、周囲が少し低くなっているので、それとわかります。

しかし、一葉が「たけくらべ」で、「或る霜の朝水仙の作り花を格子門の外よりさし入れ置きし者の有けり、誰の仕業と知るよし無けれど、美登利は何ゆえとなく懐かしき思ひにて違い棚の一輪ざしに入れて淋しく清き姿をめでけるが、聞くともなしに伝え聞く其明けの日は信如が何がしの学林に袖の色かへぬべき当日なりしとぞ」と言うような、レトロな街の佇まいは、今は見る事ができません。